

六 花

月刊俳句雑誌りっか
chairman yamada rokko
secondary chairman &
the editor in chief kotori
designed by little bird

7月号

2008

輪

山田六甲

せ 背をかがめ実梅の下を潜りけり
を 遠近おちこちに小鷺こさぎの立てる代田しろたかな
は 蠅はえとりぐも虎 天井で向き変へにけり
や 闇重き但馬の河鹿かじかに聞き入りぬ
み 水色の闇を纏まとへる螢かな
い ゐざり寄り蚊取線香折り消しぬ
は 走り寄る蛇草へびむらに逃げ込みぬ
に 逃げ戻る猫の倒せし扇風機
せ 泉水の石に水あか梅雨晴間

か 翡翠かわせみ に一瞬願ひ事唱ふ
る 留守番の駄賃だちんに鎌かまと蚊か遣やり香こう
る 累代るいだいの墓はかに実梅を供へけり
た 泰山たいざん山木さんぼくの花を包みて暮れにけり
き 傷つきし山くち榭な子しの花夜よに匂ふ
が がつがつとかき込みにけり洗ひ飯
は 鼻先の萍うきくさを亀氣にとめず
の 野の立だて傘がさ椅子ごと倒す夕ゆ立だちかな
わ 藁わら編みの籠かご一杯に蛇へび苺いちご

雪華抄

ことり

せ 堰せきを落つ水を青鷺あおさぎみつめをり
を 尾の先を水に浸して鷺立てる
は 吐き出さるごとき光よ螢火は
や 闇ぬるくぬるく更ふけゆき梅雨の月
み 耳たぶに螢を付けてやりにけり
い 息づかひ耳にぬるかり螢の夜
は はみ出さぬやう紅をひき宿やど浴ゆ衣かた
に 握にぎりたる螢に重みなかりけり
せ 背骨浮く背なを丸めて髪洗ふ

か 髪解かれゆるり浴衣脱がさるる
る 涙眼を隠さず螢ながめをり
る 欄茶撫でひとり座れる夏座敷
た 薫物の香の濃くなれる梅雨の宵
き 着慣れたる浴衣いとしく畳みけり
が 蛾の果ててをりたる朝の厨かな
は 歯の折れし櫛を瀧水へと流す
の のけぞりて螢の行方みてをりぬ
わ 湧水に浸けし唇にて笑ふ
れ 檸檬汁部屋にはじかす梅雨の夜

水鏡花ひとひらに曇りけり

水谷ひさ江

花のくづ堰せきをおつれば泡と化す

花冷はなやほどよき爛かんをさぐる指びえ

人肌ひとがほどの墓石へ草の餅

父の手の大きさに添ふ草の餅

みずかがみはなひとひらにくもりけり

「曇りけり」で写生・報告を超えた。蹲（つくばい）もしくは水が満たされた器に一片の桜が散つてきた。その瞬間に鏡のような水面が曇ったと断じたのである。そう提示されると、読者にも確かに水鏡が曇るのである。そう思わせる説得力がこの句にはある。いわゆる事実を超えてしかも事実以上に眞（まこと）を主観で写し出した作品と言える。

桃の日や両手で包む母の顔

三井 孝子

木管の音立ててをり雪ゆき解げ水みず

頬杖のごとくに支柱梅の花

黄水仙うす暗がりに匂ひ立つ

母の手に乗せてやりけり官女かんじよびな雛

もものひやりようてでつつむははのかお

「両手で包む」に深い親子の温みが伝わってくる、母親に対する万感をこめた、愛情のすべてが両手に集約されていて、切なく読者の胸を打つ。「お母さん今日は雛祭りよ」と呼びかけているのであろう。かつては母親が、両てのひらで泣き顔を包んで安心させてくれた慈愛の仕草。今は年老いた母を子のでのひらが包む。母を最も大切に思う一齣である。

たすき

梶浦玲良子

シャープの芯取り替へてゐる帰雁きがんかな
夕霞うぐひす豆の笑ひ声
星の息ふかぶかかと吸ひ牛蛙
風呂敷のてこずつてゐる別れ霜
アンカーの櫂たすきがやつと花大根

春泥しゅんでい

木内美保子

風光り水光る川稚魚ちぎよ走る
暮残くれのこる装束白き遍路道
春泥に溺れてきしむ乳母車
山風にごそつと舞ひ上ぐ椎花しいかふん粉
つゝじ燃ゆ誰も入らぬ露天風呂

せつじゆしゆう
雪樹集

丸文字

朝靄あさもやを突き出でて来し

蜺舟しじみぶね

松本文一郎

苗札なえざに丸文字多き花壇かな

幼子の万才歩行春野かな

春灯しゅんと下うか微動しゆんどうだにせぬ青頭あおつむり

雛の夜の男世帯に花あられ

斑点はんでん

出口

誠

桃色の斑点つけて山笑ふ

風に乗り風に抗ふ白き蝶

三角の空き地耕す野球帽

庭先のバケツの中に桜散る

菜の花の水に倒れて咲きゐたる

六花集

六甲選

貯水池ちよすいちをフロアに踊る水馬あめんぼう

廣瀬 佳織

水溜まりあめんぼ真似てゐる子供

しつかりと足を踏ん張り水馬

水面けすを削つてをりぬ水馬

水馬あめんぼは水玉模様の声めける

小寺ふく子

逆流に踏ん張つてをりあめんぼう

さざ波に流れてゆけるあめんぼう

あめんぼう水をけりつつ進み行く

水馬進むと見えて後ずさり

休みつつ流されてをりあめんぼう